

「中部圏の将来ビジョン」解説編② 将来を見据えた地域・まちづくりの 具体的な方向性

中部圏の持続的な発展には、将来の社会や産業構造の変化を踏まえるとともに、広域的な視点で地域・まちの構造を変革させていくことが必要とされる。本特集では、このような動きにつながる中部圏の地域・まちづくりを紹介していく。今回は、2019年3月に公表した「中部圏の将来ビジョン」で示した地域・まちづくりの具体的な方向性を解説する。

はじめに ～6つのキーワードを踏まえて～

前回9月号では、地域・まちづくりに必要な6つのキーワードを使い、「中部圏の将来ビジョン」(2019年3月公表)の背景や考え方を紹介した。

地域・まちづくりに必要な6つのキーワード

①	イノベーションの触発と新世代の成長産業の創出
②	集積とネットワークの強化
③	回遊性 点から線、線から面へ
④	ダイバーシティ・多様性の受け入れ
⑤	持続可能性
⑥	自然との共生

今回は、これらのキーワードを踏まえた地域・まちづくりの具体的な方向性について、以下の2拠点について紹介する。

- ①中部圏の対流・交流の拠点として、イノベーション・エコシステムのコア機能を担う「名古屋都心部」
- ②豊富な森林資源や街道文化などの歴史的背景を有し、リニア中央新幹線(以下、リニア)の開業による発展の期待も高い「中津川」

具体的な方向性 その① 名古屋都心部の将来像

重層的な都市空間の形成

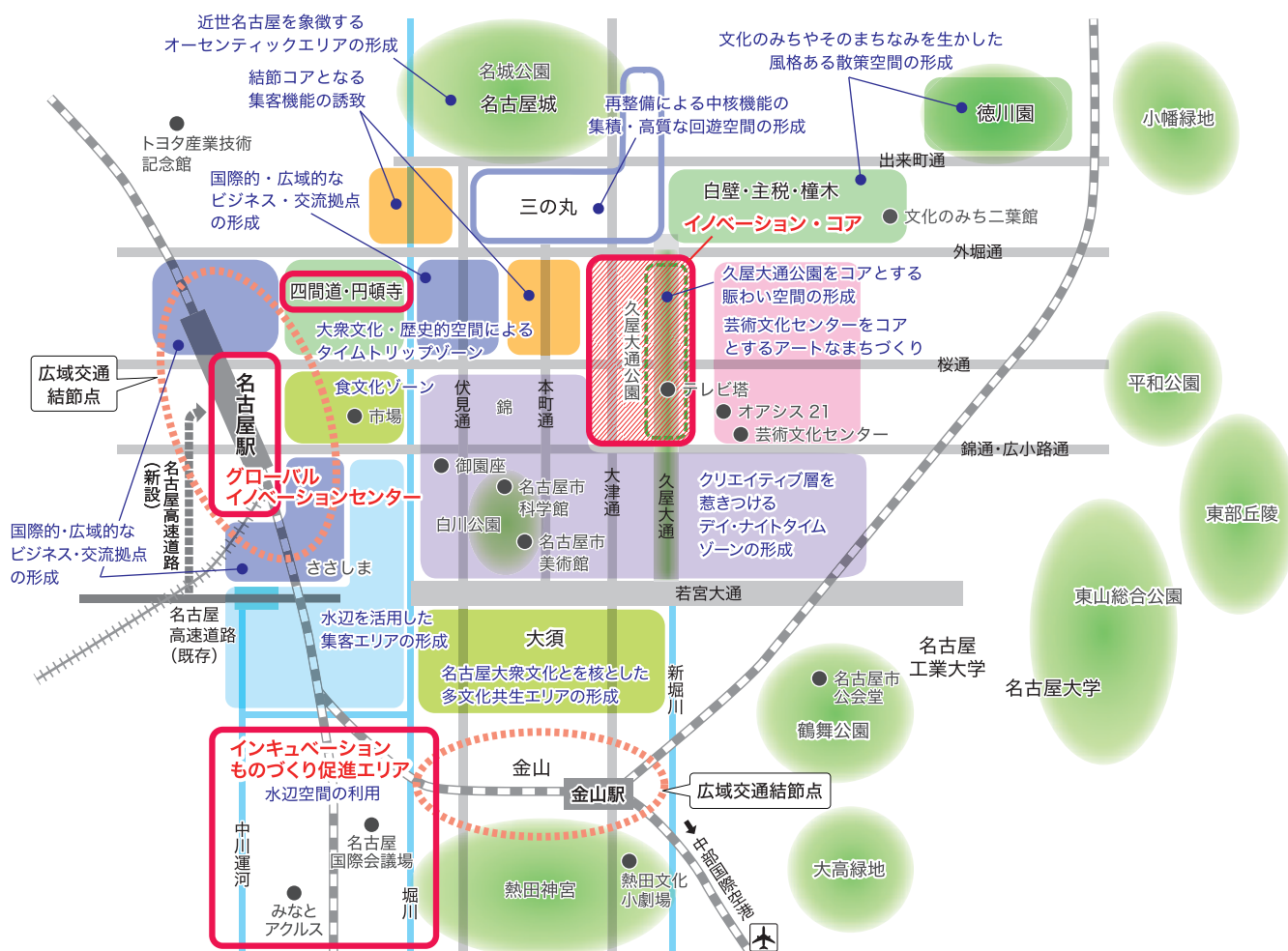
名古屋都心部の役割は、中部圏のハブとして機能することだ。中部圏のゲートウェイ、イノベーション・エコシステムのコアとして、「産業」「人」を集積する魅力的な「まち」づくりが絶対条件となる。

目標とする基本コンセプトは、それぞれの地区が歴史や特徴を踏まえた役割を持ちながら、「地区」と「地区」がつながることで「面」となって連続的につながる重

層的な都市空間の形成にある。これに向けて、装置となる機能を意識的に備えていく必要がある。中部圏のハブとして必要な機能は以下の4つ。

- ・イノベーション・エコシステムのコア機能
- ・実証実験を可能とするアーバンチャレンジ特区
- ・商業・業務機能、芸術文化機能
- ・生活空間とも近接した都市の魅力空間

「地区」と「地区」がつながることで「面」となって連続的につながる重層的な都市空間のイメージ



6つのキーワード: ①イノベーション

②集積とネットワーク

中部圏が目指す「集積とネットワークの強化」とは、名古屋都心部のイノベーション拠点を中心に、大学のサテライト、研究機関、デジタル技術産業などを分厚く集積させるとともに、各地域の拠点をつなぐネットワークの強化を図っていくこと。集積については、立体的に密度を高め、対流・交流の加速度と質を高めていく姿を目標とする。

名古屋都心部の集積の周辺に、都市空間での実証実験を可能とする「アーバンチャレンジ特区」を創設することで、ものづくり現場との近接性を生かした、圧倒的なスピードを誇る中部圏らしいイノベーション・エコシステムが構築され则认为る。

そのために必要となる主な機能は、イノベーション拠点、アーバンチャレンジ特区、クリエイティブ人材が集える緑豊かなオープンスペースなど。このオープンスペースは、災害時の避難場所としての役割も担うことができる。

栄中心部の集積イメージ



6つのキーワード: ③回遊性 ④ダイバーシティ

回遊性に必要な要素は、「地域・街区の特徴を踏まえた軸の形成と機能の充実・再配置」「歩きやすさ」「移動の利便性向上」「賑わいの創出」「美しい景観の整備」などがあげられる。名古屋城周辺地区を例にすると、オープンカフェといった路面店の設置、歩行者空間の確保、次世代路面交通の整備などで歴史的な南北の

都市軸を再生し、回遊性と賑わいのある都市空間を形成すること。さらに、大容量高速通信を生かしたストレスフリーな多言語対応によって、ビジネスで訪れる外国人や帯同する家族、インバウンド観光客など、さまざまな外国人も楽しめる空間が形成される。

また、外国人の住環境に着目すると、インターナショナルスクールの整備、医療機関の多言語対応も必要になる。さらに、地域住民と外国人移住者の橋渡しをする「通文化媒介者」的な専門家も育成していかなければならない。

名古屋城周辺の歴史的な南北軸の再生



具体的な方向性 その② 中津川の将来像

環境共生型地域のモデルケース

中津川の主な産業は、電気・輸送機械器具などの製造業、水稻・トマト・肉牛などの農業だ。さらに、北部加子母にある神宮備林をはじめとする豊かな森林資源に恵まれた林業もあり、中津川は、日本の原風景ともいわれる環境共生型の地域を形成している。さらに、中津川・馬籠宿と木曾を結ぶ中山道の街道文化や、1894(明治27)年に建築された明治座などで受け継がれている地歌舞伎といった歴史的文化もあり、リニアの岐阜県駅設置に伴い、新たな対流・交流が生まれることが期待される。

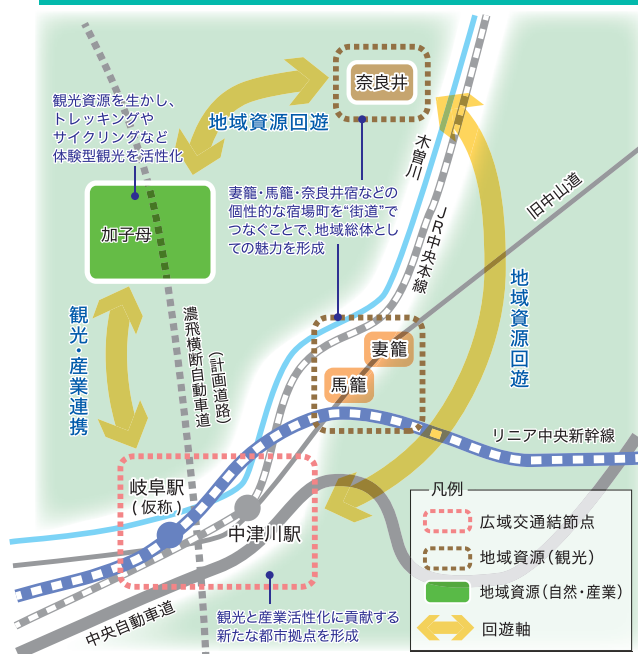
中経連は、2016年から中津川市・商工会議所・商工会などとのディスカッションや現地視察を積み重ね、「中部圏の将来ビジョン」の中で中津川の将来イメージを環境共生型のモデルケースとして提示した。

6つのキーワード:③回遊性

回遊性は、魅力的な資源を点から線、線から面へと連続的につなげることで生まれる。中津川にあてはめると、中津川宿・中央本線中津川駅やリニア岐阜県駅と街道文化、森林や明治座などの地域資源を2次交通でバランスよくつなぐことだ。オンデマンド輸送、自動運転などの実証実験を重ねながら、リニア開業に向けた準備を急がなければならない。

加えて、サイクリングなどのスポーツ、体験型観光、食・泊の充実といったアクティビティを備えることで、回遊性がさらに高まり新たな対流・交流が生まれる。

特色ある地域と地域をつなぐ2次交通ネットワーク



6つのキーワード:⑤持続可能性 ⑥自然との共生

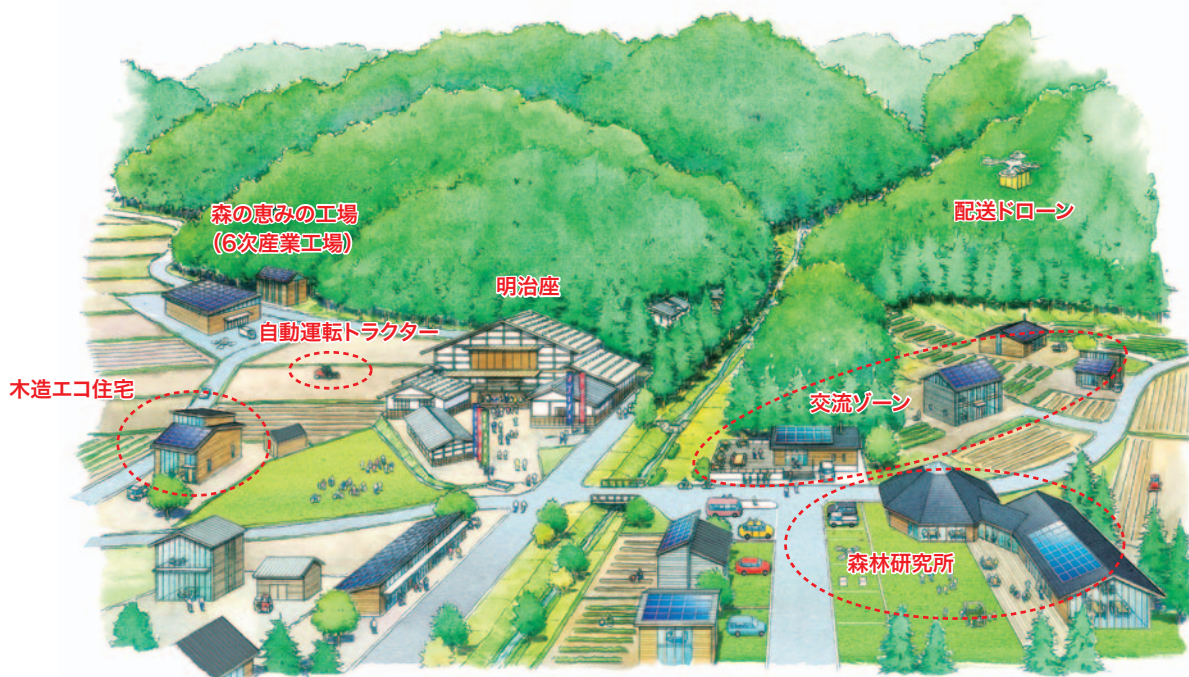
これからの地域・まちづくりでは、都市と自然が共生した環境負荷の低減、自然災害への耐性強化など、持続可能性を高める取り組みの重要性が増している。

自然は、温室効果ガスの森林吸収による地球温暖化の防止、治山治水機能の発揮、自然エネルギーの共有などで、圏域全体に安定した環境を提供している。加えて、ビジネスの圧倒的なスピード化の中で人々の心身のリフレッシュを図る癒しの場でもある。一方で産業や人口が集中している都市部は、山、森林、川、海などの自然の恵みに支えられている。

中津川北部の加子母地区をモデルとした森林、農地、歴史的文化などの地域の資源を生かしながら、自然環境の保全と地域の発展を両立する方向性は以下の4つ。

- 明治座や神宮備林、付知峡の不動滝をはじめとする観光資源を生かしたトレッキングやサイクリングといった体験観光の活性化
- 森林研究拠点の誘致で、自然生態系の研究者の集積と自然由来の新素材の開発などによる新たな産業の創出
- 古民家を再生したサテライトオフィスやテレワーク環境の整備、2地域居住の推進
- 体験工房・農業などを通じた住民と来訪者の交流とコミュニティの共生

加子母地区をモデルとした自然環境の保全と地域の発展を両立するイメージ



まとめ

中経連は、名古屋都心部の栄にイノベーション拠点「NAGOYA INNOVATOR'S GARAGE」を7月に設置し、多様なプログラムの運営をはじめた。本拠点で多くの対流・交流を生み出すとともに、大学や他地域の拠点とのネットワーク化を進め、周辺にビジネスを分厚く集積させたい。

中津川とは市・地元経済界・大学と連携し、懇談会を立ち上げ、2次交通、産業活性化、森林研究、広域観光などをテーマに具体的なプロジェクトにつながる活動も開始した。さらに、航空機産業をはじめとする飯田下伊那地域の産業の高度化・高付加価値化を目指す拠点「エス・バード」、革新的な造水・水循環システムの実用化を目指す信州大学の「アクア・イノベーション拠点」、静岡県先端農業推進拠点「AOI-PARC」、マリンバイオの中核推進拠点「MaOI-PARC」など、地域の資源や特徴を生かした取り組みが中部圏各地で動きはじめている。

中経連は、このような動きを「NAGOYA INNOVATOR'S GARAGE」も活用しながら広域でつなぎ、中部圏の持続的な発展に貢献していきたい。さらには、中部圏が広域の大きな1つの圏域として、産学官の関係者が将来を見据えて戦略的に議論し、実行活動に移していく協議会を立ち上げたい。

問い合わせ:企画部

「中部圏の将来ビジョン」は、中経連ホームページに掲載しています。是非ご覧ください。

http://www.chukeiren.or.jp/policy_proposal/2019/03/2050.html

今回は、「地区」と「地区」がつながることで「面」となって連続的につながる重層的な都市空間の形成に向けた具体的な地域のムーブメントを紹介します。

